

安宅あの合戦たかから篠原しのの合戦はらへ

治承四年(一一八〇)源頼朝・木曾義



『源平盛衰記』巻二十八 北国所々合戦事(金沢市立玉川図書館 村松文庫)
 寿永2年(1183)5月2日、加賀・越中両国武士団は安宅の渡りに城を構えた。平氏軍先陣平盛俊勢が押寄せ、双方川を隔てて遠矢を射、河中でも戦ったが、平盛俊勢は渚を渡った。

仲が相ついで挙兵し、これを契機に全国的規模の反乱が起き、この源平の争乱は治承・寿永の内乱ともいう。

義仲が養和元年(一一八二)中頃より越後に勢力を伸ばすにつれ、加賀・能登・越前の平氏知行国や越中でも、義仲に呼応する在地武士の反平氏の蜂起が続発した。

寿永二年(一一八三)四月、北陸道制圧のため北陸道追討使平維盛らを大将とする平氏軍一〇万騎は北陸道に進撃し、義仲の指令をうけた越前・加賀・能登・越中の北陸武士軍が籠る越前燧城をおとし、五月加賀に入った。

富樫宗親・家経、林光明・倉光成澄・井家範方ら加賀武士軍と越



『義仲勲功図会』(石川県立図書館所蔵) 寿永2年6月1日、安宅の合戦での義仲(右の武将)の勇姿。



齋藤別当実盛奮戦図 尾形直実画(白山市 若宮八幡宮所蔵)
 篠原合戦で、平氏軍が落ちていくなかで、ただ一騎踏みとどまって奮戦した齋藤別当実盛を描く。

中武士軍は、篠原から安宅の渡りに後退し、城を構え梯川にかかる橋板をおとして応戦したが、渚を渡った平氏軍先陣の平盛俊勢五〇〇〇余騎に圧倒され退却した。この時北加賀の井家範方一党一七騎は根上の松で討死している。

加賀を制圧した平氏軍は越中・能登に進んだが、間もなく越後から越中に南下した義仲軍は、越中に逃れていた北陸武士軍を結集し、五月十一日越中・加賀国境の倶利伽羅合戦と、翌日越中・能登国境の志雄山合戦で平氏軍を撃破し、ここに戦局は逆転する。

六月一日敗走する平氏軍を義仲と叔父源行家軍五万余騎は、安宅・篠原で追撃した。義仲軍には林・富樫・倉光・下田などの加賀武士や信濃・越中武士も加わっていた。安宅では平氏軍は橋を引いており、義仲の命をうけた林光明の瀬踏みで源氏軍は一気に梯川を押し渡った。源平双方軍勢をくりだし激戦を交えたが、やがて源氏軍は全軍総攻撃を展開し平氏軍を粉碎した。

平氏軍は篠原に退いたが、この篠原合戦は壮絶を極め、『源平盛衰記』は、「馬ノ馳違音、矢叫ノ声、雲毛響地モ動クラント覚タリ」と記す。戦いは暮色迫るころには決し、平氏軍は総崩れとなって敗走した。その中で、篠原にただ一騎踏みとどまり奮戦した齋藤



国指定重要文化財 木曾義仲奉納の伝齋藤別当実盛着用兜(小松市 多太神社所蔵)

別当実盛は、赤地の錦の直垂に黒糸威の鎧をつけ、白髪を黒く染めていたという。しかし信濃の武士手塚太郎光盛に討たれ悲壮な最後を遂げた。

この安宅・篠原の合戦で、平氏軍は壊滅的な敗北を喫し、その後帰京したのは、三万余騎に過ぎなかったといわれる。
 (清水郁夫)